

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4372800914		
法人名	医療法人 荒瀬会		
事業所名	グループホーム「年輪」		
所在地	上益城郡甲佐町緑町359番地9		
自己評価作成日	平成30年11月1日	評価結果市町村受理日	平成31年1月15日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://search.kaigo-kumamoto.jp/kaigosip/Top.do
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 あすなる福祉サービス評価機構
所在地	熊本市中央区南熊本三丁目13-12-205
訪問調査日	平成30年11月21日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

利用者様の心身ともに現在の状態が維持できるように、管理栄養士の献立をもとにバランスの摂れた食事の提供、生活機能向上の為、理学療法士によるリハビリ等も行っていきます。母体である病院との連携も密であり、重度化、看取りも相談支援を行っています。利用者様が自分らしく笑顔で過ごして頂くよう支援していきます

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

入居者の馴染みある地域という立地の中で、出来る力の発揮や役割のある生活(料理への関わり、モップがけ等)が入居者の自信回復として生かされ、車いす利用者でも地域の中での生活が支援されており、“生まれ育った地域の中で…”という新たな理念の具現化に向けた積極的な活動が表れている。入居者の入れ替わりという過渡期にもあり、グループホーム本来の姿として、家族との昼食会、好きなカラオケでの楽しみ等元気な様子も垣間見られる。母体病院のバックアップ体制(医師や看護師等)の構築とともに、現在臥床中心の生活や、在宅酸素利用等もおられる中で健康管理の徹底や日々気づきを持ったケアに努めている。我が家に帰られても「帰ろうか」との入居者の言葉に、終の棲家としてのホームの存在を表しており、最期までその人らしい人生が全うできますよう、笑顔での支援に大いに期待したい。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当する項目に○印
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごさせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I.理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	理念の見直しにより「ご利用者様が生まれ育った地域の中で、自分らしく笑顔で心穏やかに過ごせるよう支援いたします」を理念とし、実践している	今年、ケア会議の中で理念を見直し、再作成したパンフレットに記し、地域へあいさつに回りにより啓発に努め、運営推進会議の中でも紹介している。職員のケア規範として理念を基に、毎月理念を想起させた話し合いとともに、管理者による指導である声かけ時等笑顔でのケア姿勢が浸透している。	地域住民はホームの存在は認識されており、更に内容まで踏み込んで知ってもらう必要があるとして啓発に努められている。今後も地域密着型事業所として、ホームの役割などを啓発していきたい。
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	地域の隣保班に参加している。花植え等職員が地域と関わっている。地域の総会にも参加し、交流に努めている	隣保班の一員として回覧板の受け渡しや花植え、地域の総会等に参加している。また、運営推進会議時に地域行事に案内もあり、敬老会でも出かけている。また、立地的な環境を活かし、近くでの買い物、初市に出かける他あゆ祭りには職員も踊りに参加する等地域の中のホームとして活動している。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	地域の敬老会等参加し、地域の方々とコミュニケーションをとり、年輪の事を知って頂くと共に協力を得られるようにしている。	/	/
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	2ヶ月に1回、年6回開催している。行政・地域・家族代表の方を交えながら入居者の様子をお伝えし、いただいたご意見を現場のケアに反映させている。	2ヶ月毎に開催される運営推進会議は、現場からの状況報告の他、参加委員の相談、地域行事のリサーチの場として生かされ、年2回は防災訓練をこの会議の中で開催している。また、熱中症についての勉強会や身体拘束等の適正化の指針等作成し説明する等有意義な会議である。	運営推進会議での家族の言葉が職員の励みに繋がられている。家族の訪問も多いホームであり、代表以外にも参加されるよう促されることで、違う目線での意見等も出されるものと思われ、検討いただきたい。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	運営推進会議での情報交換が主になっている。今後、行政や他事業所への情報発信、情報収集をどのように行っていくか課題も残る	町役場に近く、書類提出に出かけ情報交換を行っているが、最小限度である。運営推進会議に毎回参加を得る等協力関係を築いている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	ミーティングの中で不適切なケアがないか検討し「身体拘束はしない」という目標に向けスタッフ一同ケアの統一を図っている。玄関の施錠は開放している	身体拘束等適正化に向けた指針の作成と、身体拘束廃止検討委員会として運営推進会の中で検収内容やホームでの対応等を紹介している。特に入居者の状況の違いにより対応の仕方に違いがあると説明し、日々の申し送りや毎月のケア会議の中で話し合いを繰り返している。帰宅願望や外出傾向は無く、立ちあがる能力や維持できる状況は見守る等ケアを統一している。現場でありそうな事例や不適切なケアと思える事案は記録として残し、全職員が共有するとともに、家族に説明するとしている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	高齢者虐待についての研修を受けた職員による伝達講習を実践し、全職員に対し虐待についての意識づけを行った。今後も継続して学習する必要があると痛感した。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	勉強会を開いているが、内容についての理解は十分でない。今後学ぶ機会をもっと作って行きたい		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時は運営規定及びリスク内容について分かり易く説明を行い同意を頂いている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	毎月の利用料を家族来苑による入金型とし、職員による利用者様の1ヶ月の様子の記事を渡し家族の意見を頂き、そのご意見や想いをスタッフ全員で共有しケアに反映させている。	利用料持参払いとして毎月訪問される仕組みであり、家族の訪問時に状況報告や意見等を聞き取りしている。日常的な訪問や、誕生会への参加や花見、芋煮会等行事への訪問も多く、家族からの相談事等ケア会議の中で話し合い、ケアサービスに反映させている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	毎月職員間にてケア会議を開催し、意見・要望をのべてもらう。変更が必要な場合は速やかに対応し職員のストレスケアに関しても全職員で検討している。	法人の室長参加の下、全職員が参加する毎月のケア会議の中で、職員個々の気づきや要望、不満等の聞き取りは職員のメンタルヘルスケアの一貫として生かされている。職員同士のコミュニケーションも良く、役割分担として責任あるケアに努めている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	個々の努力を尊重し、出来るだけ反映されるように上司への情報を伝達しているが、現実には難しい状況である。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	職員全員がケアの統一が出来るようケア会議は行っているが、研修等には思う様に参加出来ていないのが現状。今後スキルアップをして行く為に、は研修参加の機会を増やし、個々の努力も必要となる。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	月1回の事務長会議、法人内のグループホーム乙女との情報交換等行っている。又、GH上益城部会に参加し情報交換を行い向上を目指している。		
II.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	御利用者様の話を傾聴し、穏やかな雰囲気作りに努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入所時等、説明を行い要望を受け止め双方で意見交換し家族が話しやすい環境にしている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	管理者、ケアマネ、家族(利用者様含む)で意見交換(聞き取り)を行い、どのようなサービスが必要か検討し、助言等支援を心がけている		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	必要以上の介助にならない様に一緒に出来る事は共同作業にするよう努め、日常的な会話を多く取り入れ家族的な雰囲気をつくり、個々を尊重した生活ができるように心がけている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	御家族の面会の機会を利用し、御利用者の様子を伝え情報交換の場を確保し、要望を伺い現場に反映できるよう協力関係を築いている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	近所のスーパーに買い物に出掛けたり、近所の散歩、甲佐町での行事等に参加する事で関係継続に努めている。又、居室には家族の写真等を飾って思い出を大切にしているよう配慮している。	祭りでは歩行者天国になる等の立地条件を活かし、初市見学等地域の行事に出向いたり、買物に出かけると知人から声を掛けられている。また、家族の情報から得意分野を發揮させた日常生活や、知り合いでの入居や、家族同士も顔見知り、盆・正月の帰省と家族の協力も得ながら馴染みの人・場所との関係が途切れないよう支援している。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	御利用者の個性を大切にし集団での生活をして頂いているが、時には、利用者間でのトラブルが起こる事があるがお互いの訴えを聞きながら臨機応変に対応している。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	死亡によって退所された入居者の御家族にもグリーフケアに取り組み関わりが持つことが出来たかと思う。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	なるべく本人より意思確認を行うように努めているが、困難な場合も多く本人の様子をしっかりと観察し本人に合ったケアが出来る様、御家族の意向も反映するようにしている。	自分の思いをだされる方は少なく、入居者個々のバックグラウンドをリサーチし、笑顔での生活を支援したいとケア会議で話し合っている。家族からの情報が活かされ、カラオケで楽しむ方や畑の野菜作りに関わったり、料理の手伝い等プランに反映させ、実践している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	直前に利用されていたサービス事業所、御家族や本人様との会話の中で情報収集に努めている。新たに知り得た情報は、スタッフ間で共有するようにしている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	一人一人に合ったレクリエーションや可能な家事手伝い等を観察し、個々の能力を把握する事で心身の状態を確認しながら、生活のリズムを作り、一日でも長く共同生活が行えるよう努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	月1回の職員によるケア会議を通じて各入居者の日中・夜間の問題点等を話し合い、より本人に合ったケアを検討し実践してる。	介護計画書は、好きな事・できる事を見つけるとして個々の役割を見出したプラン等理念も視野に作成されている。毎月ケア会議を行うとともに、状態変化時に話し合いが行われている。介護計画書は家族の訪問時に意見を聞き取りし、かみ砕いて説明し同意を得ている。	夜間の不眠に関する事案や他科受診等家族と相談されている。変化のない入居者でも、毎月訪問される機会を捉え、意見や要望等家族の声を記録として残すことを検討いただきたい
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	毎日の介護記録と月1回の一月の様子の記録を参考にモニタリングや計画書の見直しを行っている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	状態変化に伴う他科受診の際の情報提供や同行しての情報提供などその時々に応じて対応している(基本は家族対応)。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	定期的に、区長、民生委員、町の福祉課の方々意見交換の場は設けているがその他地域資源の情報については乏しい状況である。 今後は、情報収集に努めて行きたいと考えている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	母体病院での受診 医師や看護師と情報を共有し連携を密にすることで状態を把握し急変にも対応できるようにしている	入居前から通院されていた入居者も多く、馴染みの関係にある母体病院をかかりつけ医として、受診に出かけている。母体での受診や他科受診等状況により家族に依頼しているが、緊急時等柔軟に応じている。職員は日頃からバイタルチェックや表情、動作などから異変を早期に発見し、母体病院と連携を図り、適切な医療を支援している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	少しの変化にも看護師や訪問看護師等に相談して受診の必要性等の判断を仰ぎ対応するようにしており、必要な情報はスタッフ間で共有し、家族への報告も行っている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時には情報提供、退院時にはサマリーにて情報交換を行い日頃から病院関係者との連絡・相談を行っている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所ですることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	重度化や終末期に入られた場合の対応については入所時にご意見ご希望を確認している。途中でご意見が変わられた場合は、随時相談に対応することとしている。	重度化・終末期は家族と相談しながら、今後のケアを検討している。家族・院長・看護師長等との話し合いにより看取りを行う等、希望があれば終末期まで支援する体制である。看取りケア研修にも参加し、看取り後の家族からの心温まる手紙は、職員のモチベーションに繋がっている。	在宅酸素利用者もおられる現状に、痰吸引も出来るケアを行いたいと意欲も聞かれた。母体の医療機関の存在のみならず、スキルアップが必要との言葉も聞かれ、介護のみならず看護両面からの研修に大いに期待したい。
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	異変時の連絡・指示受けのマニュアルは職員に周知しているが、全ての職員の実践力については今後訓練の必要がある。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	毎年2回避難訓練を実施しており内1回は必ず区長・町職員・消防職員に参加していただきAEDの訓練なども行っている。今後は、地震、水害などの災害訓練も行っていく予定である	運営推進会議の中での防災訓練や避難訓練(消防署立会い)を行っている。近隣には訓練へ声を掛けているが、今のところ参加は無い。居室入口に入居者の歩行状態を明記し、台風時には夜勤者に副を配置している。	備蓄は母体で備えられており、ホームでも確認されることが望まれる。また、地震・水害等も訓練する予定との事、熊本地震を風化させないよう、早期の実施を期待したい。
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	利用者様によっては認知が進んだり体力低下することにより声掛けしても行動にいたることが難しくなっている方が多いが、一人一人の人格を尊重しプライバシーを損ねないように心がけている。	入居者の呼称は苗字を基本としながら、以前から本人に馴染みのある呼び方で呼ぶようにしている。守秘義務についてケア会議や日々の申し送りで注意喚起を行い、情報の漏洩防止に努めている。職員は入室時のノックを徹底し、入居者の目線に腰を下ろしながら顔を見て会話するよう努力している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	日常生活の中で、行動や表情を観察しながら危険が伴わない事であれば極力見守りそれぞれにあった自立支援に努めるようにしている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	午前中は、利用者様の好きな色塗りや、本読みなどをすることでゆっくり自分の好きな時間を過ごされている、食事も一人一人にあった食事を提供しているがすべてが自由にできるまでには至っていない。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	起床時、職員が声をかけしながら自分で洗面や整容が出来る方は見守り、出来ない方は介助し支援を行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	利用者様と職員と一緒に食事の準備をすることはほとんどないが、茶碗拭きなどは、数名に手伝いをさせていただいている。今後は、一緒に食事の準備したり一緒に食事したり出来る様体制を整えていきたい。	法人栄養士の献立をもとに、近くのスーパー等産地消としたり、差し入れの野菜を活用している。普段は入居者のみに食事を提供しているが、行事食は職員も同じものを食することとし、訪問日も賑やかな食事風景が垣間見られた。入居者の中には、大鍋で作るいも煮の食材を手際よく準備する方もおられる。今年は裏の畑で職員とともに栽培したジャガイモもが豊作だったようで日々の調理に活用している。	入居者の出来る力を活かした食事作りであることや、入居者の思いである家族との食事も叶えている。今後も一緒に作る楽しさとともに、入居者と職員と一緒に食事をする事が出来るよう検討いただきたい。
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	管理栄養士のメニューを元に料理を作り提供している。又、御家族からの頂き物(野菜)を調理する事もある。毎食の食事量は記録している。脱水予防のため、水分摂取も定期的に行い、体調不良時は特に気をつけている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後自力で可能な方は歯磨きの声掛けを行い洗面台の方で行っていただいている。介助が必要な方は職員と一緒にテーブルの所で口腔ケアを行っている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	日中、ある程度時間を決め声掛けにて自然排泄が出来る様に支援している。その際は、排泄終了後陰部清拭等清潔の保持に努めている。	職員は入居者の排泄パターンから一人ひとりの間隔を見て声をかけ、トイレに誘導している。中には自立された方もおられる。殆どの方がリハビリパンツを使われているが、他の排泄用品と組み合わせながらのコストダウン等負担軽減に努めている。夜間帯はポータブルトイレを使う方もおられ、日中の掃除徹底により、清潔に管理している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	体操等で体を動かすようにし、水分補給、乳製品の摂取を試見て自然排便を促すが、どうしても排便が無い場合は医師の指示にて下剤を処方服用していただいている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	一通り順番に沿って案内している。体調の変化、汚染等の状況等に考慮し対応している。入浴が困難な利用者様には、清拭等を行っている。今後はシャワーチェアを購入し、入浴困難な方にも対応していきたい。	バイタルチェックにより入浴可否を見極め、週2～3回の入浴を支援しており、皮膚疾患や汚染時にはシャワーや清拭で対応している。入浴拒否もなく、なかなか上がりたがらない方や、入浴前に自ら着替えの準備をしたり、湯船の中で昔話に花が咲く等楽しみながらの入浴である。シャワーチェアの導入が決定されており、安全な入浴にもつながるものと大いに期待したい。	入居者と職員とが1対1になる機会でもあり、今後も「気持ち良かった」と言ってもらえるような支援を継続していきたい。
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	日中、出来る限り活動されるように促がし、夜間十分な睡眠が取れるよう心がけてはいるが、それでも寝付けない方の対応が課題として残るところではある。職員一人一人の対応の仕方を勉強し向上していきたい。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	服薬ファイルを使用し、全職員が目的・用法・用量・副作用など確認し服用時は誤薬予防確認と服薬確認をしている。症状に変化が見られた場合は記録・報告している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	食器洗い、拭き、洗濯たたみ廊下、ホールのモップ掃除等一人一人にあった役割を見つけて取り組んで頂いている。行事への参加や散歩などで、気分転換等の支援を行っている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	計画的に苑外行事を組み気分転換を行っている。また、天気がいい日は散歩や買い物に出掛けるようにしている。	ホーム周辺は川沿いに古くからの商店や民家が立ち並ぶ環境にあり、散歩中に地域の方から写真を撮ってもらうこともある等、顔なじみの関係ができています。病院受診や地域の行事(敬老会・初市・のみの市)などに出かけ、足湯に出かけた際には外食も楽しんでいる。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	金銭管理が可能な入居者がいない為、御家族からの希望により職員が必要な物を購入したり、御家族が購入されている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	利用者が家族への電話希望時は職員が必要に応じ介助や内容の伝達を行っている。手紙のやり取りは家族の協力も必要となり実現には至っていない。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	建物自体が縦長で全ての空間が一直線上にあり見守りには適している。壁には花を飾ったり、こいのぼり、雛祭り等、季節感のある手作りの物を利用者様と一緒に作ったりして飾っている。	玄関を入ると左側に台所とリビングが一体化し、その先の居室部分へと動線が続いている。狭い空間を上手く工夫し、人数や行事に合わせてテーブルの配置を変えている。居室前の廊下には細長く作り付けの木製ベンチがあり、入居者が腰を下ろしたり、洗濯物を置いたりする場として活用している。	駐車場への道路(玄関から先)環境について、何か講じることが出来ないか検討されることを期待したい。
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	建物のスペースの関係で独りで過ごせる空間が居室にしかない。テレビを設置しているホールにあるソファに気の合う利用者2名程で過ごされている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	利用者の家族の写真、寄せ書き等を持ち込まれている。居心地の良い部屋作りに努めている。	居室には洗面台と押入れが設けられ、季節外の衣類や布団が収納されすっきりとした部屋である。家族の手で写真や小物が持ち込まれ、掃除は全員で行い、入居者もできる方はモップ掛けを行っている。居室中心の生活になった方にも、環境を整え、声かけをしたり、リビングで一緒に食事を摂ることで他者との繋がりを大切にしている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	床は段差が無い為、車椅子で短い距離自走される。歩行できる方が多いので足元には、物を出来るだけ置かないようにし転倒防止に努めている。		